

メキシコのお巡りさん

アメリカ西海岸、最南端の都市サンデエゴの迂回路「ルート八〇五」を南下すると、メキシコとの国境に突き当たる。メキシコの国境ゲートは二つあるが、開いているのはいつも一つである。ゲートの横には係管が一人立っている。車を止め、窓からパスポートを出し、

「ブエノスディアス」（おはようございます）

と言うと、パスポートを見るでもなく手を振って行けというデスチャー。これで入国審査は終了である。初めての時はあまりの簡単さにびっくりしたものだ。た。アメリカの道路と違って国境から数百メートルは舗装されているが、そこを過ぎると穴ぼこだらけの凸凹道だ。その道を十五分ほど走ると、工業団地の中の工場に到着する。

一九八九年六月、私はメキシコのティファナ工場に駐在を命じられた。ティファナはアメリカとの国境沿いの都市で、賃金が安い上、この地域で造られた商品をアメリカに輸出する時、関税が掛からないという特典があり、日本の電機メーカーの多くが工場を稼働していた。

この為、多くの日本人駐在員がメキシコ人を指導しながら家電製品を生産していた。しかし、メキシコは治安、生活環境や子供の教育にはよくないという理由から、日本企業の駐在員は、アメリカで家を借りて、毎日メキシコに通勤するという生活をしていた。

前任者との引継ぎが終わり、海外生活にもなれた頃、機械の部品をもとめ、ティファナの町を走っていた時パトカーに捕まった。メキシコではほとんどの道路は最高速度四十キロメートル規制であるが、悪路にかかわらず、四十キロメートルで走る車は少ない。しまったと思

ったが後の祭り、車を右に寄せ停まる。

この様なときは、パスポートに十ドル札を挟んでお巡りさんに渡す。また、この様な事態にそなえ、いつも十ドル札を持っているように、といったことも引継ぎ事項のひとつであった。急いで財布を見たが十ドル札がない。全て二十ドル札ばかり、お巡りさんはすぐそこに近づいている。しぶしぶ二十ドル札をパスポートに挟んだ。

「スピードオーバーです」

近づいてきたお巡りさんは、車の窓から顔を覗かせながら言った。私は無言でパスポートを渡した。お巡りさんはパスポートを見ながら、なれた手つきで、二十ドル札を抜き取ると、

「安全運転をしてください」

と言いながらパスポートを返してくれた。

私はスピード違反で捕まったことよ、十ドルでよい所を二十ドル払ったことが悔しかった。お巡りさんがパトカーに帰っていった後も、しばらくその場に車を停めていた。

駐在してから一年が経過した休日、メキシコに遊びに行った。観光地で土産物屋を見て回り、時間があったので、これはと思っていた木彫りの人形を値切り倒し、最初の言い値の二十%で買った。満足しての帰り道、気が付いたらサイレンが鳴っていた。四〇キロのところを二十キロほどオーバーしていた。

「しまった、また捕まった」

慌てて車を止め、財布を見た。十ドル札はある。しょうがないか。パスポートに十ドル札を挟み、お巡りさんが来るのを待った。

「スピードオーバーです。安全運転をしてください」

「ちよつと急いでいたので」

そういいながら私はパスポートを渡した。お巡りさんは、パスポートを見ながら、十ドル札を器用に抜き取ると、パ

スポートを持ったまま、後ろのパトカーを指差し、

「あの車に、私のボスが乗っている」と言った。

「????」

私は一瞬何を言っているのか分からなかった。

「????」

しばらく考えて、ボスの分、もう十ドル渡せと言っているのだと分かった。

「今渡したのをボスに渡せば」

と言うと

それまで英語で話していたお巡りさんは、

「あなたの言っていることは理解できない」

と急にスペイン語で話し始めた。

(「こんちくしょう」)

私は、十ドル札を握りお巡りさんに投げつけるように渡すと、パスポートを引ったくるように受け取った。

「気をつけて帰ってください」

お巡りさんは、笑顔で言った。

私は車を急発進させた。なぜボスの分まで払わなければいけないのか。賄賂が通用する世界の善し悪しを、一度に経験した気持ちであった。そして、又も相場以上の金額を取られたことが悔しかった。

ある日、駐在員の会食がティファナであった。メキシコはアメリカに比べ物価が安く、肉やくだものも豊富で日本食レストランもある。単身赴任者が多いので、仕事が早く終わった週末は食事に行く事があった。焼肉やタコスを食べ、マリアッチを聴き、至福な時間を過ごした。会食が終わり帰宅する事にした。

工業団地近くの国境ゲートは、二十二時に閉まるため二十四時間開いている都市部の、国境ゲートに回ることとし、全員、車で連なつて店を出た。が、信号やロータリー式の交差点でばらばらになった。夜も遅かったので、帰りを急い

でいた、スピードも出ていた。街路灯もなく夜道は暗かった。急に後ろの車のサイレンが鳴り赤色灯が回転した。

「そんなばかな」

あわてて車のブレーキを踏み、道路ぎわに車を停め財布を見た。札は一枚も入っていない。そうだ、さっきの食事で支払いをしたとき、すつからかんになっていたのだった。「どうしよう。お金がない。こんな時はどうしたら良いのだろう」

こんな時どうしたらよいか、誰にも聞いた事がなかった。頭が混乱してきた。お巡りさんが近づいて来ている。窓ガラスがコツコツとノックされた。

覚悟を決め、窓ガラスを降ろした。

「こんばんは。スピードオーバーです」私は黙ってパスポートを出した。お巡りさんはパスポートを開いて、お金が入っていないのを確認すると。

「スピードオーバーの罰金を支払っていただかないと困ります」。

何故、罰金を支払わないのか不思議そうに言った。

「お金を持っていないません」

私はそう言つて空の財布を見せた。お巡りさんは財布を見た。カードや名刺や小銭は入っていたが、お札は一枚も入っていないかった。少し考えて首をすくめ、財布とパスポートを返してくれた。

「安全運転をしてください」

そう言うとお巡りさんに帰っていった。

「何故？」

信じられなかった。違反を摘発し罰金を自分のものとするメキシコのお巡りさんが、見逃してくれるとは。先ほどまで、どうしようかと心配していた事が嘘のようだった。そうか、お巡りさんといえども、持っていない者からは、巻き上げる事ができないのだ。いままでの二回分、四十ドルを取り返した気分だった。そうだ、新しい財布を買おう。そして、お金を入れないでおこう。